

モードは語る

中野 香織

変わる元号、進化の転機

日本の礼服には固有のジャンルが存在する。「黒い略礼服」である。結婚式に出席する男性ゲストが、黒い略礼服に白ネクタイをつけて並ぶ光景は、洋服文化の本家から見ると奇異に見えるようだ。

独特の略礼服が誕生したのは、第2次世界大戦後。戦前、民間人はフロックコートやモーニング、または燕尾(えんぴ)服を礼服として着た。戦後、多くの国民は困窮をきわめた。そんな時代に、羽織はかまの印象ともなじみやすく、汎用性の高い略礼服を、あるアパレルメーカーが考案したのであった。

仕掛け人は「カインドウェア」(東京都千代田区、当時の社名は『渡喜』)の

「黒い略礼服」新時代

三代目、渡辺国雄さん。「ソーシャル産業を拓く 渡辺国雄の歩んだ道」(日本繊維新聞社編、非売品)に、市場創出の過程が率直な言葉で記されている。1915年生まれの渡辺さんはアカデミックな家庭に育った学究肌で、日本刀研究の第一人者となり、神道思想研究で文学博士になっている。ビルマなどの戦地にも赴き、終戦後、妻の実家の紳士洋服商に身を投じてアパレルビジネスを始めた。

礼装が必要となる未来を見据えて研究を重ねた渡辺さんは、最終的に「黒のダブルスーツ」を商品化する。ダブルにしたのは「シングルより立派に見えたから」。ズボンの裾もダブルにした。しか



ソーシャル産業を拓く

渡辺国雄の歩んだ道

略礼服の誕生秘話が語られる「ソーシャル産業を拓く」

し西洋で礼装ズボンは常にシングルだ。「こんなスタイルの礼服がヨーロッパのしきたりでは、とうてい受け入れられないとは気が付かなかつたし、近代日本社会の礼服の原型になろうとは思いつかなかつた」「私の無知からデザインされた礼服」になってしまった、と渡辺さん。

その後も渡辺さんは市場創出に力を尽くす。百貨店に業界初の礼装コーナーを設置し、社交的にも着用可能なシングルスーツを開発し、アクセサリーも含めてフォーマルウェアを総合化する。英国の王室御用達テーラーとも提携するなど企業努力を続けた。

日本の黒い略礼服が誕生して半世紀以上が経った。元号の変わり目は、渡辺さんの思いを受けとめつつグローバル時代に合った形で礼服をバージョンアップする転機でもある。(服飾史家)